

# 生命健康科学部学生の自己教育力 — 第一報 入学時における自己教育力の実態 —

## The First Report Investigation on Self-Directed Learning in Chubu University — Comparison between Departments of Nursing and Biomedical Sciences Students at School Entry —

堀 文子 牧野 典子 山田 聡子 井口 弘子  
渡邊 実香 上田ゆみ子 足立はるゑ

Fumiko HORI Tsuneko MAKINO Satoko YAMADA Hiroko IGUCHI  
Mika WATANABE Yumiko UEDA Harue ADACHI

### 要 旨

学生の自己教育力育成を目的とした保健看護学科の自己教育力研究チームは、本学生命健康科学部の平成18年度入学生を対象に、自己教育力とその関連要因の入学時の実態を質問紙調査した。その結果、以下のような特徴がみられた。

1. 自己教育力の総得点は、生命医科学科より保健看護学科の方が有意に高かった。
2. 自己教育力の4側面のうち、側面Ⅱ「自己の対象化と統制」、側面Ⅲ「学習の技能と基盤」、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」の得点は、生命医科学科より保健看護学科の方が有意に高かった。
3. 自己教育力の各側面（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ）の得点は、側面Ⅰ「成長・発展への志向」が最も高く、側面Ⅳが最も低かった。
4. 関連要因として調査した自己効力感及び自尊感情の得点は、両学科間に有意差は認められなかった。

今後は、縦断的に自己教育力、自己効力感、自尊感情等を継続して調査し、教育との関連性を総合的に検討していく必要がある。

**キーワード：**自己教育力，看護大学生，自己効力感，自尊感情

### I. はじめに

自己教育力とは臨教審<sup>1)</sup>によると生涯にわたる人間形成の基礎を培うために必要な主体的に学ぶ意思、態度、能力などをいうとされ、Knowles<sup>2)</sup>、梶田<sup>3)</sup>、森ら<sup>4)</sup>は主体的に自力で学習するのみでなく、目標の自己決定や自己評価等、“自分をどのように教育するか”といった自己統制の要素等

が含まれると述べている。

本学部は新設学部として、生命医科学科と保健看護学科の二つの学科を有する。生命医科学科は病気の予防や健康増進等を総合的・専門的に学び、保健看護学科は看護学に加えて医学とバイオの基礎を学び、将来それぞれの立場から社会に貢献できる有能な人材を育成することを目的としている。両学科に共通することは、共に生命と健康にかか

わる専門職として期待されていることである。したがって、将来、専門職としてその役割を果たすには、日進月歩の医療や社会のニーズに対応するための自己教育力を高めることが必要である。卒業までに自己教育力がどのように変化し、何に関連するか等を調査することは学部教育上の有効な資料が得られると考える。

保健看護学科の自己教育力研究チームは、2006年度から看護大学生の自己教育力育成を目的とした研究に取り組み、これまでに、自己教育力に関する研究論文の概観<sup>5)</sup>、自己教育力の概念検討・関連要因の特定・測定尺度の検討<sup>6)</sup>を手がけてきた。

本稿ではこれまでの分析結果から、特定された自己教育力尺度<sup>7)</sup>と関連要因を用いて、入学時における自己教育力の実態を学科別に調査したので報告する。

## II. 研究方法

1. 対象：平成18年度生命健康科学部入学生、保健看護学科81名、生命医科学科66名。

2. 調査実施時期：平成18年4月12日。

3. 調査方法：既存の尺度を用いた無記名自記式質問紙による集合調査。

4. 倫理的配慮：この調査は、本学の倫理委員会の承認を得た後、研究の目的、調査の趣旨について書面と口頭で説明し実施した。質問紙の回収箱への投函をもって同意が得られたものとした。回収時は、研究者以外の教員が担当した。

5. 調査内容：調査内容は、個人の属性（9項目）と自己教育力（西村の自己教育力尺度40項目）および関連要因として、自己効力感（坂野・東条<sup>8)</sup>の一般性セルフ・エフィカシー尺度16項目）と自尊感情（Rosenbergの自尊感情尺度（邦訳版<sup>9)</sup>）10項目）である。調査項目は、合計65項目であった。以下に各尺度の概要と回答方法について述べる。

自己教育力：梶田は自己教育性を「Ⅰ成長・発展への志向」「Ⅱ自己の対象化と統制」「Ⅲ学習の技能と基盤」「Ⅳ自信・プライド・安定性」の4側面で捉え、その実現を判断するためにⅠ・Ⅱ・Ⅳの側面に各10項目の質問項目の「自己教育性調査票」を作成した。本調査で使用した西村<sup>7)</sup>の自己教育力尺度は、梶田の自己教育力測定尺度「自

己教育性調査票」にⅢの側面の10項目を追加して合計40項目とし、4側面すべてを捉える尺度へと改訂したものである。回答方法は「あてはまる」5点、「ややあてはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「ややあてはまらない」2点、「あてはまらない」1点の5段階リッカート型評定とした。総得点範囲は、40～200点で、高得点者ほど自己教育力が高いことを示す。

自己効力感：社会的学習理論では、ある行動をうまく行うことができるかという個人の確信を「自己効力（セルフ・エフィカシー：self-efficacy）」と呼んでいる。本調査で使用した一般性セルフ・エフィカシー尺度は、坂野と東条が、Banduraの社会的学習理論に基づき自己効力感の強弱を測定する為に作成した尺度であり、特定の場面や行動ではなく、一般的で具体的な場面での自己効力を測定するために作成された自己効力感尺度である。質問項目は16項目で、回答は「はい」1点、「いいえ」0点の2件法である。得点範囲は0～16点で、高得点者ほど自己効力感が高いことを示す。

自尊感情：自尊感情とは、人が自分自身のことについてどのように感じるかという感じ方のことで、Rosenberg, M (1965) は他者との比較でなく自身で自己への尊重や価値を評価する自尊感情測定尺度を作成した。本調査では、Rosenbergが作成した自尊感情測定尺度の、山本ら (1982)<sup>10)</sup>による邦訳版を使用した。質問項目は10項目であり、回答方法は「あてはまる」5点、「ややあてはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりあてはまらない」2点、「あてはまらない」1点の5段階リッカート型評定である。得点範囲は、10～50点で、高得点者ほど自尊感情が高いことを示す。

6. 分析方法：自己教育力の総得点と各側面および自己効力感・自尊感情の得点は、Mann-WhitneyのU検定にて2学科間の比較を行った。

それぞれ、P値が5%未満を統計学的有意とした。統計処理には、SPSS (Ver.14J) for Windowsを用いた。

## III. 結果

調査票の回収率は95.2%であり、有効回答率は98.6%であった。有効回答数138名の内訳は、保

健看護学科79名（学科総数81名・回収率97.5%）・生命医科学科59名（学科総数66名・回収率89.4%）であった。

### 1. 対象者の属性

両学科の平均年齢は保健看護学科18.2±1.0歳、生命医科学科18.1±0.5歳であり、その他の属性（表1）においても大きく違いはみられず、入学後一人暮らしを始めた学生が両学科共に増加している。ただし、保健看護学科の方が女子学生の割合が高かった。

表1 対象者の属性

|        |      | 保健看護学科 (n=79) |         | 生命医科学科 (n=59) |         |
|--------|------|---------------|---------|---------------|---------|
|        |      | 名             | (%)     | 名             | (%)     |
| 性別     | 男性   | 12            | (15.2)  | 37            | (62.7)  |
|        | 女性   | 67            | (84.4)  | 22            | (37.3)  |
| 入試形態   | 一般入試 | 46            | (58.2)  | 32            | (54.2)  |
|        | 推薦入試 | 33            | (41.8)  | 27            | (45.8)  |
| 同居有り   | 入学前  | 78            | (98.7)  | 57            | (96.6)  |
|        | 入学後  | 66            | (83.5)  | 53            | (89.8)  |
| 入学前同居者 | 家族   | 78            | (100.0) | 57            | (100.0) |
|        | その他  | 0             | (0.0)   | 0             | (0.0)   |

### 2. 自己教育力、自己効力感、自尊感情の学科別比較

#### 1) 自己教育力（図1）

今回用いた自己教育力測定尺度全体の信頼性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数は0.86であった。各側

面の $\alpha$ 係数は0.51～0.76の範囲であった。

#### （1）自己教育力総得点

保健看護学科は平均135.6（SD±15.7）点・中央値138.0点であり、生命医科学科は平均127.6（SD±15.8）点・中央値127点であった。両学科の自己教育力総得点には有意差が認められた。

#### （2）側面Ⅰ：成長・発達への志向

側面Ⅰ10項目の合計得点は、保健看護学科が平均39.1（SD±4.2）点・中央値39.0点、生命医科学科は平均38.0（SD±4.9）点・中央値39.0点であり、両学科に有意差は認められなかった。しかし、「自分の能力を最大限にのばすよう、いろいろな努力したい」、「これから専門的な資格や学位などを取りたい」の2項目では有意差が認められ、両項目共に保健看護学科の方が得点が高い傾向にあった。

#### （3）側面Ⅱ：自己の対象化と統制

側面Ⅱ10項目の合計得点は、保健看護学科が平均33.6（SD±4.8）点・中央値33.0点、生命医科学科は平均32.4（SD±4.2）点・中央値32.0点であり、両学科に有意差が認められた。項目別では「いやになった時でも、もうちょっとだけもうちょっとだけ、と頑張ろうとする」の項目で有意差が認められ、保健看護学科の方が得点が高い傾向にあった。

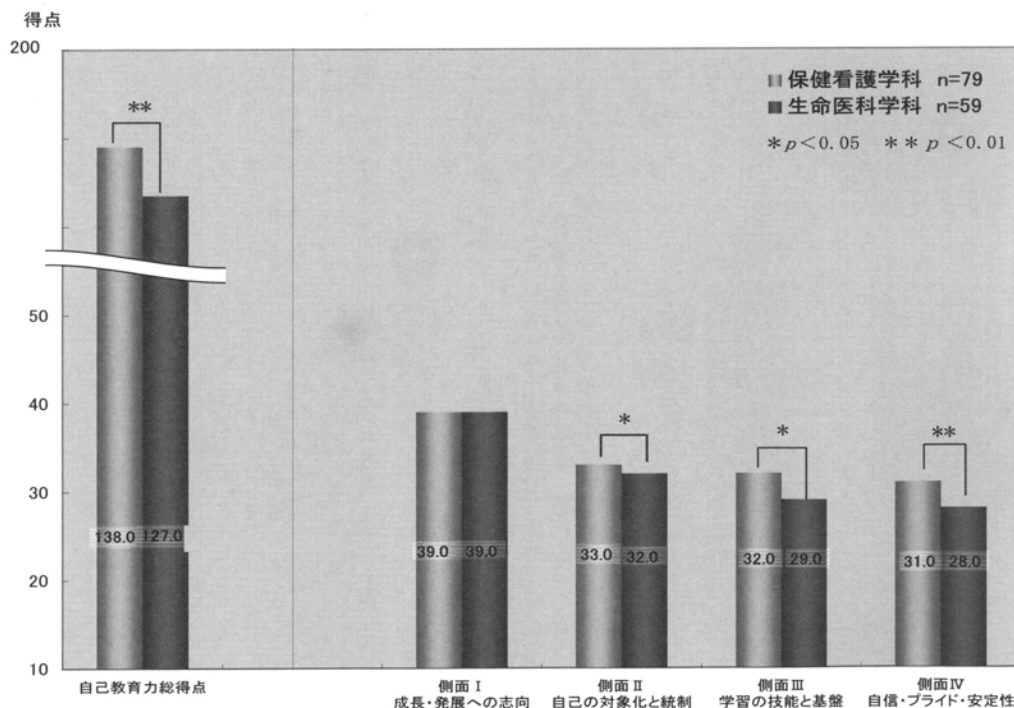


図1 自己教育力得点学科比較

#### (4) 側面Ⅲ：学習の技能と基盤

側面Ⅲ10項目の合計得点は、保健看護学科が平均32.3 (SD±6.0) 点・中央値32.0点、生命医科学科は平均29.9 (SD±6.2) 点・中央値29.0点であり、両学科に有意差が認められた。項目別では「自分の調べたいことがある時に図書館(室)を利用している」、「自己評価する時には、自分の目標に達して行っている」、「わからないことがあると、すぐ人に聞く傾向がある」の3項目で有意差が認められ、いずれも保健看護学科の方が得点が高い傾向にあった。

#### (5) 側面Ⅳ：自信・プライド・安定性

側面Ⅳ10項目の合計得点は、保健看護学科が平均30.5 (SD±6.3) 点・中央値31.0点、生命医科学科は平均27.4 (SD±6.1) 点・中央値28.0点であり、両学科に有意差が認められた。項目別では「今のままの自分ではいけない、と思うことがある(逆転項目)」、「何をやってもだめだと思う(逆転項目)」、「自分のやることに自信を持っている方だと思う」、「生まれ変わるとしたなら、やはり今の自分に生まれたい」、「今の自分に満足している」、「自分にもいろいろと利点があると思う」の6項目で有意差が認められた。全項目で保健看護学科の方が高得点であり、逆転項目の2項目でも「あてはまらない」と回答する傾向が強かった。

#### 2) 自己効力感(図2)

保健看護学科の自己効力感得点は平均6.6 (SD±3.9) 点・中央値6.0点であり、生命医科学科は平均5.4 (SD±3.9) 点・中央値5.0点であった。保健看護学科の方が高得点の傾向が認められるが

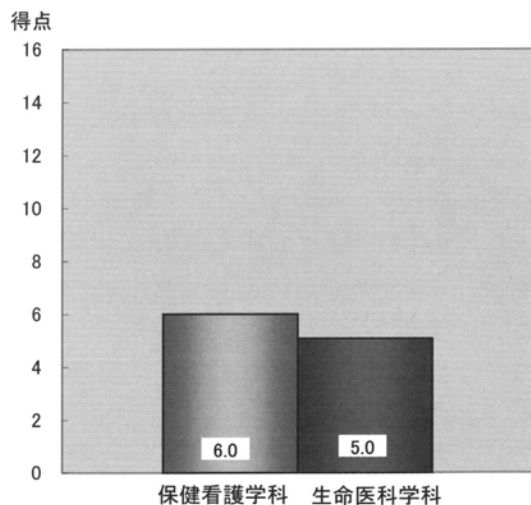


図2 自己効力感得点学科比較

有意差はなかった。

#### 3) 自尊感情(図3)

保健看護学科の自尊感情得点は平均31.5 (SD±4.0) 点・中央値32.0点であり、生命医科学科は平均28.9 (SD±6.4) 点・中央値29.0点であった。保健看護学科の方が高得点の傾向が認められるが有意差はなかった。

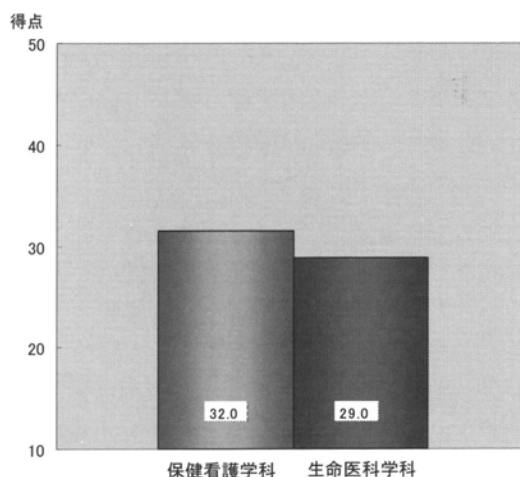


図3 自尊感情得点学科比較

## IV. 考察

本学部学生の、自己教育力に関する調査では、保健看護学科の方が、生命医科学科の学生に比べ、有意に自己教育力が高いという結果を得た。各側面の結果においても、側面Ⅰの「成長・発展への志向」を除く、側面Ⅱ「自己の対象化と統制」、側面Ⅲ「学習の技能と基盤」、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」で、保健看護学科の方が、生命医科学科の学生に比べ、有意に自己教育力が高いという結果であった。本調査は、入学時に実施した実態調査であり、入学時の属性は、性別以外に大きな特徴的な違いはなく、また、先行文献において自己教育力に影響を及ぼす要因として挙げられた自己効力感、自尊感情についても、両学科に有意な差が見られなかった。これらのことから、保健看護学科の方が、生命医科学科の学生に比べ、有意に自己教育力が高いという結果を得たことに関連する要因を特定することは、本調査の結果からは困難である。

しかし、質問項目、側面Ⅰ「自分の能力を最大限に伸ばすよう、いろいろと努力したい」、「これから専門的な資格や学位などをとりたい」、側面

Ⅱ「いやになった時でも、もうちょっとだけもうちょっとだけ、と頑張ろうとする」、側面Ⅲ「自分の調べたいことがある時に図書館（室）を利用している」、「自己評価する時には、自分の目標に達して行っている」、「わからないことがあると、すぐ人に聞く傾向がある」において保健看護学科の学生が有意に高い値を示していることから、保健看護学科の学生は、入学時より自分の目標が明確であり、その目標を達成しようとする意識が表れているのではないと思われる。保健看護学科の学生の多くは、看護専門職者になり国家資格を得るという目標を持って入学しており、この目的意識の違いが、生命医科学科との入学時の自己教育力の差に影響している可能性が考えられる。この違いについて検証していくためには、生命医科学科の学生の卒業後の目標をも捉えながら、経年的に自己教育力について調査を実施していくことが求められる。

自己教育力の各側面の得点は、両学科ともに、側面Ⅰ「成長・発展への志向」が最も高く、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」が最も低いという結果であった。側面Ⅰが高く、側面Ⅳが最も低いという結果は、多くの先行研究において同様の結果を得ている<sup>11)~17)</sup>。新實<sup>13)</sup>はこの傾向を、看護師や看護学生を対象として実施した先行研究と比較し、看護学生の特性ではないかとしている。しかし、多久島ら<sup>16)</sup>の報告では、看護学学科の学生のみならず、衛生技術学科の学生においても同様の結果を示している。さらに、今回、資格取得を目指していない、本学部生命医学科の学生においても同様の結果を示した。そのため、この結果は、看護学生を含む、大学生にとっての特性であることが推測され、青年期の自己同一性の確立という発達課題を抱えている大学生にとって、「達成・向上したい」という意欲を強くもちながらも、「自分は何者なのか」、「自分に何ができるのか」、「自分にはどんな価値があるのか」など模索している状況を示しているのではないかと考える。梶田は、側面Ⅳは、他の3つの側面を促進させる心理的基盤となる<sup>3)</sup>と述べており、側面Ⅳがどのような要因にて上昇していくかを継続的に検証して行くことにより、自律した社会人育成のための大学教育のあり方の資料となりうるのではないかと考える。前述したように、今回の調査では自己効力感、自尊感情において、両学科に違いは認められなかつ

た。自己効力感の得点は、自己効力感5段階評定における学生の基準である5～8点（普通）<sup>8)</sup>に両学科とも属し、自己効力感の示す「ある行動をうまく行うことができるかという個人の確信」については、ほぼ平均的な値であった。また、自尊感情に関しては、総得点50点中、両学科ともに約30点前後であり、極端な自尊感情の高低は認められなかった。多くの先行研究において、自己効力感、自尊感情は自己教育力育成に関する要因であるとされており、今後も自己効力感、自尊感情、カリキュラム、人生への目標などを経年的に調査し、総合的に自己教育力との関連を検討していく必要がある。

## V. 結論

1. 自己教育力の総得点は、保健看護学科の方が有意に高かった。
2. 自己教育力の4側面のうち、側面Ⅱ「自己の対象化と統制」、側面Ⅲ「学習の技能と基盤」、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」の得点は、保健看護学科の方が有意に高かった。
3. 自己教育力の各側面の得点は、側面Ⅰ「成長・発展への志向」が最も高く、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」が最も低かった。
4. 関連要因として調査した自己効力感及び自尊感情の得点は、2学科間に有意差は認められなかった。

## 謝辞

本調査にあたり、快くご協力いただいた本学部生命医科学科、保健看護学科の学生および教員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

なお本研究は、平成17・18年度中部大学生命健康科学研究所の研究助成を受けて行った研究成果の一部である。

## 引用・参考文献

- 1) 文部省編：「自己教育力」の育成などの視点を提起—中教審教育内容等小委員会が審議経過を報告—，文部時報，26-43，1983
- 2) Knowles, M. : Self-directed Learning : A guide for Learners and Teachers, 1975

- 3) 梶田毅一：自己教育への教育，36-53，明治図書，1992
- 4) 森敏昭他：大学生の自己教育力と高校時代の学習指導法の関係，広島大学大学院教育学研究科紀要，51，1-8，2002
- 5) 堀文子、牧野典子、渡邊実香他：看護大学生の自己教育力育成に関する研究－第一報 学生の自己教育力に関する研究の動向－，中部大学生命健康科学研究所紀要，7-19，2006
- 6) 牧野典子、山田聡子、渡邊実香他：看護大学生の自己教育力に関する文献的考察一定義、尺度、関連要因に焦点をあてて－，日本看護学教育学会誌投稿中
- 7) 西村千代子、奥野茂代、小林洋子他：看護婦の自己教育力，日本赤十字社幹部看護婦研修所紀要第11号，9-39，1995
- 8) 坂野雄二、東條光彦：セルフ・エフィカシー尺度，上里一郎監修：心理アセスメントハンドブック，西村書店，478-489，1993
- 9) 清水裕：自己への評価，堀洋道他編：心理尺度ファイル，垣内出版，64-79，1996
- 10) 山本真理子、松井豊、山成由紀子：認知された自己の諸側面の構造，教育心理学研究，30，64-68，1982
- 11) 酒井明子：看護学生の自己教育力に関連する要因」福井医科大学研究雑誌，1(1)，113-128，2000
- 12) 高橋美砂子、新山真奈美：「看護学生の課題の取り組み方と自己教育力との関連」，秋田県看護教育研究会誌，No.26，20-25，2001
- 13) 新實由香理：「看護学実習における自己教育力と授業課程評価の変化およびその関係」，長野県看護大学紀要，6，61-71，2004
- 14) 加藤直子、堀裕美、鈴木伸子：「基礎看護学実習Ⅱ終了時における自己教育力」，秋田県看護教育研究会誌（1341-4712），29号，17-22，2004
- 15) 梅橋操子、多久島寛孝、三村孝俊他：「基礎実習前後における自己教育力の変化」，保健科学研究誌，No.1，105-112，2004
- 16) 多久島寛孝、永田華千代、北野正文他：「医療系大学在学中の学生の自己教育力の推移」，保健科学研究誌，No.2，95-108，2005
- 17) 南修子、園田麻利子、七川正一他：「成人看護学実習における学生の自己教育力に影響する要因の検討」，鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要，Vol.10，26-37，2006

## 著 者

堀 文子 (Fumiko HORI)

中部大学生命健康科学部 保健看護学科 助教授。名古屋大学医療技術短期大学部看護学科卒業・同専攻科修了、名城大学理工学部卒業。専門分野：基礎看護学。名古屋大学医学部附属病院にて助産師として小児内科、産科病棟に勤務。岐阜医療技術短期大学看護学科、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは、①看護学教育方法、②看護・介護労働者の負担軽減に関する研究。

牧野典子 (Tsuneko MAKINO)

中部大学生命健康科学部 保健看護学科 教授。愛知淑徳大学大学院現代社会研究科現代社会専攻博士後期課程修了。修士（国際教育）。専門分野：成人看護学、急性期看護学、救急看護学、災害看護論。総合病院の看護師、高校衛生看護科、静岡県立大学短期大学部、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは①看護職のキャリア形成、②看護教育の改善、③災害看護の教育方法、④手術看護の専門性に関する研究。

山田 聡子 (Satoko YAMADA)

中部大学生命健康科学部 保健看護学科 講師。東京医科歯科大学大学院医学系研究科。修士（看護学）。専門分野：基礎看護学、看護管理学、看護教育学。藤田保健衛生大学病院、東京済生会中央病院、愛知県立看護大学基礎看護学領域助手、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは、①臨地実習におけるインフォームドコンセント、②病院看護職者の現任教育③看護部門の組織構造と機能に関する研究。

井口 弘子 (Hiroko IGUCHI)

中部大学生命健康科学部 保健看護学科 助教授。2001年George Mason University看護学部修士課程修了。Master of Science in Nursing 専門分野：基礎看護学。名古屋大学医学部附属病院、名古屋大学医学部保健学科助手、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは、①患者情報プライバシーと患者情報の共有に関する研究、②異文化背景を持ち日本に在住する人々のQOLに関する研究。

渡邊実香 (Mika WATANABE)

中部大学生命健康科学部 保健看護学科 講師。名古屋大学大学院医学系研究科。修士（看護学）。専門分野：母性看護学。東京都立築地産院、名古屋大学医学部附属病院にて助産師として勤務。名古屋大学医学部保健学科発達看護学講座、母性看護学・助産学領域助手、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究分野は、不妊看護。特に不妊治療中夫婦の心理的支援に関する研究。

上田ゆみ子 (Yumiko UEDA)

中部大学生命健康科学部 看護実習センター 助手。名古屋大学医療技術短期大学部卒業。専門分野：基礎看護学。名古屋大学医学部附属病院、小牧市民病院にて看護師として勤務。看護専門学校非常勤講師、中部大学生命健康科学研究所嘱託研究員を経て現職。

足立はるゑ (Harue ADACHI)

中部大学生命健康科学部 保健看護学科 基礎看護学教授。岐阜大学大学院医学研究科 研究生満期終了。医学博士。中部大学大学院 経営情報学研究科博士前期課程修了。専門分野：基礎看護学、看護管理学。臨床看護師、看護師長、副看護部長、教育歴として看護専門学校専任教員、藤田保健衛生大学衛生看護学科基礎看護学教授を経て現職、主な研究テーマ①看護職・介護職のストレスマネジメント、②人材育成に関する研究、③看護職のコミュニケーションに関する研究。